

## 週日の説教

金 大烈 神父 2011年6月25日(土)

### 《愛・謙遜・信仰 -100人隊長の姿から-》

今日読まれた福音(マタイ 8・5 - 17)の箇所には、いろいろと考えさせられる内容が含まれています。それは、この100人隊長が見せた模範についてです。私たちが見習うべきところがあります。

100人隊長が見せた心には、3つの素晴らしいものが隠れています。一つは、愛。二つ目は謙遜。三つ目は信仰です。

一つ目の『愛』についてです。この100人隊長の下にいた『僕』が病にかかって苦しんでいるという話でした。その当時、『僕』というのは物のような存在でした。お金で売り買いされ、もし必要がなくなれば捨ててもよい。そのような存在でした。しかし、この100人隊長は、僕に対する本当の愛情を見せました。『愛』そのものだったと思います。それを読んで私たちがこの人から習わなければならないのは、『愛』です。誰かを使う時、使われる時に何よりも基準としなければならないのは『愛』なのです。

二つ目の『謙遜』についてです。このような愛のある人だから、自然にへりくだる心を持つことになるのです。彼はイエス様に、「わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません。ただ、ひと言おっしゃってください。そうすれば、わたしの僕はいやされます。」と言いましたね。これは立派な祈りになっています。日本では、この祈りをミサの中で使いませんが、他の多くの国のミサでは使います。ご聖体をいただく前の「神の子羊の食卓に招かれた者は幸い。」という司祭の言葉の後、日本では「・・・、あなたをおいてだれのところに行きましょう。」と言います。しかし、オリジナルの原本は、「・・・、ひと言おっしゃってください、わたしの靈魂は癒されます。」という言葉になっています。この100人隊長の心を言っているのです。私たちにとって一番大事なご聖体を受け入れる前に捧げる最大の謙遜な言葉になっているのです。「ひと言おっしゃってください。わたしの靈魂は癒されます。」素晴らしい告白ですね。私たちは、このような謙遜さを見習わなくてはなりません。

三番目は『信仰』です。二番目と重なりますが、100人隊長は、「あなたがひと言おっしゃれば、全てが成し遂げられます。」という確信があったから、自分の身分も考えずにイエス様に願ったのです。彼は異邦人でした。イスラエル人ではありませんでした。イエス様が、多くの言葉と振る舞いで述べ伝えたイスラエル人ではなくて、イスラエル人が犬の子と呼び、人間として認めなかった異邦人でした。そのような人が、イスラエル人にも見られないような立派な信仰を見せたので、イエス様が感心したのです。

この福音を読んで、信仰というのは、「主よ、主よ。」と言うからできるものではなくて、「主よ、主よ。」と言えなくてもできるものなのだと思います。

そういう意味で、私たちは本当に気をつけなければならない面をけっこう持っていることを意識しましょう。

最後のイザヤの預言の中に

「彼はわたしたちの<sup>わずら</sup>患いを負い、わたしたちの<sup>にな</sup>病を担った。」

という言葉があります。これ以上のことがあるでしょうか。神様が私たちのために何をしてくださったのか、この言葉の中に全てが収められています。一緒に読んでみましょう。

「イエス様はわたしたちの患いを負い、わたしたちの病を担った。」

ありがとうございました。